

# 記者の目



山田 麻未  
東京社会部(前生活報道部)

がん患者がよりよく生きるために、いま必要なことを探る連載「がん社会はどこへ 第一部迷える患者たち」(2月、くらしナビ面・計6回)の取材に加わった。連載のテーマの一つは「がんに関する情報をどう選択するか」。取材に当たりがん情報について調べたところ、インターネットや書籍で情報が氾濫していることに驚いた。それぞれが正しさを主張している。情報があふれ返るいま、科学的裏付けが明確な情報を自身で選別できる判断力を高めることが求められている。

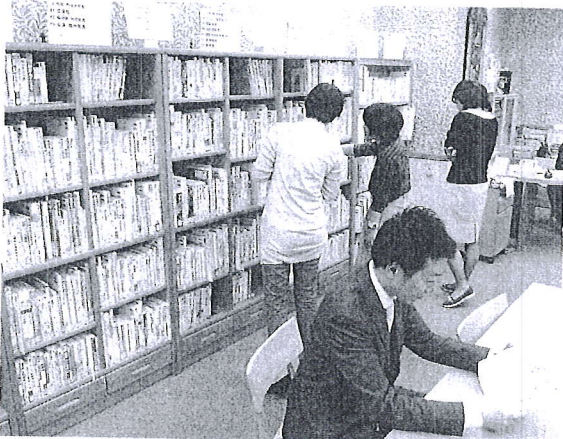
## 「氾濫するがん情報」

たが、本によって意見も対立しており、どうやらそうではないことが分かってきた。

### 専門外の医師が本で極端な主張

表紙に「元国立がんセンター医師」とある西日本の「がんセンター」勤務経験に触れた医師の本がある。この医師が監修した本について、インターネット上では高い評価のコメントも寄せられている。「希望が持てた」「信じられるものについては信じていきたい」――などだ。

# 科学的裏付け 見極めを



聖路加国際病院の学習センターには司書や医師が選んだ本が並び、患者や家族が利用できる――東京都中央区で、山田麻未撮影

この本は、科学的根拠に基づいた現時点での最善の治療法「標準治療」でなく、健康食品による代替療法を勧めている。国立病院の名前を出さず、「信頼性の高い本である」と強調しているようだが、当該のがんセンターがこの監修者の医師について「1年間、整形外科の非常勤職員として勤めた事実はあるが、これのみでは誇大な広告」とホームページで告知していた。

「日本医科大学武蔵小杉病院で、抗がん剤を専門に扱う腫瘍内科教授、勝俣範之医師は「がん患者のつらさや再発への恐怖などの弱みにつけ込んで商売する悪徳クリニックが多いので注意すべきだ」と指摘する。医師だからといってすべて信頼できるのは限らず、特にがん専門医でない医師によるがん情報は注意深くみた方がよいようだ。

### 治療方法を巡り 家族間で対立も

また、「医師は自分や自分の家族ががんになったら抗がん剤を使わない」という話もよく聞か、実際はどうなのか。勝俣医師は「抗がん剤治療を受ける場合もあるし、受けない場合もある。そもそも一概にくれられない話。なぜなら、部位、病状、年齢など状況

況により全く違ってくる」と説明する。

取材を通して、家族間で治療方法を巡り対立したという話も聞いた。「家族が自分の希望とは違う治療を勧めすぎて困った」というケースのほか、「正しい情報」を知らなかったから治療法の選択を誤った」と亡くなった家族について話すケースもあった。あふれ返るがん情報が家族関係にも影響を与えてしまうことは不幸と感じた。

インターネット上のがん情報について、信頼できない情報や研究段階の治療を勧めるなど、内容に問題のあるものが半分以上あるという研究(2007年、後藤悌・国立がん研究センター中央病院医師)もある。

信頼性の低い情報も広がっていることを認識した上で、不安や疑問があれば、専門的ながん医療を提供する「がん診療連携拠点病院」など全国424カ所に設置されている相談窓口、「がん相談支援センター」に尋ねてほしい。患者本人だけでなく家族など周囲の人の相談も可能で、全国どこからでも電話を受け付けている。「ブログでこういう情報を見たけれど……」「テレビや雑誌で見たのだが」といった相談に医療関係者が応じてくれる。 2015.5.19